岩手県の林業と広葉樹

平成27年度の我が国の素材生産量は２００５万㎥でした。岩手県の素材生産量は１５２万㎥で、全国でも北海道、宮崎県に続いて３番目に多い量となっています。当県の素材生産における特徴の一つは広葉樹材の割合が高いことで、31万㎥と素材生産量の２割を占めており、全国的にも北海道の62万㎥に次いで２番目になります。全国生産におけるシェアは約14％であり、針葉樹では約８％ですから国産広葉樹材の供給に大きな地位を持っていることが分かります。全国的に見ると広葉樹の素材生産のピークは昭和46年の１９２３万㎥でした。その後減少し平成２年に一千万㎥を下回り、平成27年は２２４万㎥とピーク時の10分の１近い量になってしまいました。現在広葉樹の主な用途は紙を作るために使われる木材チップ用であり、95％がこれに向けられます。岩手県においてもこの割合はほぼ変わりません。

木材チップ以外の使い方は何でしょうか？スギやマツ等の針葉樹材は住宅の柱や梁その他の構造材や下地材として製材や合板の形で使われます。近年の柱が壁の下に隠れてしまう大壁工法では構造材としての木材は人の目に触れません。これに対し広葉樹は床、壁、ドア・窓などの枠、階段、カウンターなどの住宅内装、机、ベッド、ダイニングセットなどの家具、このほかピアノ等楽器の部材、バチ・スティック類や時計やフォトフレームの枠など、人が接する生活に身近なところで使われます。広葉樹は針葉樹に比べて密度が高く、表面が堅く、耐衝撃、耐摩耗などの面で有利であるほか、材色や木目が多様で様々なデザインを生み出すことが出来ることから、このような用途に使われてきました。かつては、鉄道やトラックの床、TVの側板などより多くの用途がありましたが、資源の縮小や競合部材の進化、生活様式の変化により現状になった経緯があります。しかし依然として日本人は生活環境に潤いを与える材料として広葉樹材を評価していると言えるでしょう。

広葉樹材の生産現場

広葉樹材の加工と価格

このような用途に岩手県の広葉樹はどれくらい使われているのでしょうか？木材受給報告書には、他に合板用と製材用という用途があります。合板というのは丸太を薄くかつら剥きにして平たい板状にし、繊維方向（木の上下）を直交するように貼り合わせた物です。この技術の強みは丸太の品質によりますが、一定の品質を持った面材を大量にとることが出来ることです。従って広葉樹の場合、このような薄く剥く技術をいろいろな形で使います。高品質材は１㎜以下に薄くスライスし、合板やＭＤＦ（中質繊維板）等の表面に張って美観を求められる場所で使われます。かつら剥きした場合は材の表面は板目になりますが、柾目が欲しい時は大きく製材したフリッチと呼ばれる原盤をスライスします。フローリングの形に製材した物を２～３㎜の厚さにスライスし、合板やＭＤＦの表面に貼ったフローリングがマンション、戸建ての住宅の中で多く使われます。このように合板系の製品は住宅、ビルなどの壁内装の他、家具等に使用されます。これに使われる材質は相対的に良い物で、節や変色などの欠点のないものが選ばれ、㎥当たり数万円から数十万円に

及ぶものがあります。高い品質を要求することから輸入材が多く使われるため、国産材の使用はわずか1.6万㎥しかあません。そのほとんどは北海道産です。

内装、家具に使われる木材はまず製材で適当な寸法に加工されます。その後数ヶ月間、外気で乾燥させます。家具メーカーや加工メーカーに出荷される前には乾燥機で含水率を7％程度まで落とし、出庫後養生させることで10数％の平衡含水率にして製品へ加工されます。このような過程を経ることで狂いの出ない安定した製品となるのです。近年、建物の高断熱化、高気密化が進んでおり、冬場は建物内の湿度が極めて乾燥する傾向にあり、含水率の管理は必要なこととなっています。

我が国で伐採される広葉樹の内、製材工場を経て内装、家具などに加工される量は約10万㎥です。これは国内で用材として伐採される広葉樹の4.7％でしかありません。岩手県では1.7万㎥が生産されており、北海道に次ぐ生産量となっています。岩手県のシェアは16％で、１道１県で56％を占めます。製材された板はその後用途によって様々な加工がされます。先に述べた薄くスライスする原盤となる物は非常に高価ですし、集成材として貼り合わせて使われる物は小さなサイズまで採るため、比較的低質な丸太を使用できますので、原木市場では㎥あたり1万5千円位から数十万円の値段をつけます。

海外資源の枯渇と国内資源への期待

先に述べたように岩手県では広葉樹素材生産の内の95％がチップ用であり、その価格は平成27年度では㎥あたり8千500円前後でした。価格的に有利な製材用の割合を増やすことは出来ないのでしょうか?これまで、広葉樹製材の世界においては国産材の減少を輸入材が補ってきました。この30年位はロシアなどから大量に輸入されてきましたが、今は我が国の国際競争力の低下に加え、資源問題があり輸入は減っています。資源的には安定している北米、欧州からの輸入も見られますが、価格的に高く、用途が限られ、ロシア材の代わりにはなり得ない状況です。従って、製材工場などの需用者は丸太を欲しています。需要があっても原料がないために仕事が出来ない状況が続いています。一方で岩手県をはじめとして我が国の広葉樹林はかつての薪炭利用がなくなり、資源的には休んでいました。またあまりに放置された結果としてナラ枯れ病が発生しており、単に置いておくだけでは決して良い森林にはならないことも明らかになってきました。山側にとってもずっと価格が低迷してきた木材パルプ用では経営的に厳しく、高価に売れる物はきちんと仕分けして販売するようになっています。

広葉樹流通における岩手県の役割

岩手県には北海道旭川市に次ぐ規模の広葉樹の原木市場がありますが、落札率が高く需要者が材を求めていることを反映しています。需要者も変わってきています。中国やベトナムなどから既製品として建材、家具、クラフト等が大量に入ってくるようになり、国内のメーカーは厳しい状況にあります。このような中で生き残る一つの方向として、小ロットでも特徴のある製品を作る動きが強まっています。また合法木材を使っていく流れもあり、出所のはっきりした材料が求められています。その結果として、これまでロットがまとまらない事が欠点とされていた国産材を使おうという動きとして現れています。例えば国内でも最大規模の木質家具メーカーであるカリモクはニュースタンダード・シリーズとして国産広葉樹の家具を製品化しています。このような動きは旭川や岐阜県の高山と言った我が国を代表する家具産地でも同様にあります。一方で小規模の家具工房も全国に多数あり、そのような職人と結びついて地域の材を活用する動きもあります。

岩手県には最終製品を作るメーカーは数少ないですが、豊富な広葉樹資源とそれを生産する体制、中間加工を行う製材業などがあり、全国の加工メーカーに材料を供給する役割を果たしています。全国的に見て広葉樹の製材工場は少なくなっており、その役割は重要です。

広葉樹は萌芽による更新が可能なことから低コストで林業を行える可能性もあり、現在育成されつつある資源を大事に且つ有効に活用してゆくことは、消費者の要望に応え、岩手県の林業の多様性を確保するという点においても意義のあることと思われます。

森林総合研究所東北支所

天野　智将

０１９（６４１）２１５０